

第1章 総括

1 現況評価指標及び施策評価指標の評価結果

第2部で記載した現況評価指標及び施策評価指標（重点施策事業の評価指標）の評価結果を、前計画の施策体系に基づき、以下のとおりまとめました。

なお、前計画の施策体系については、本書「さいたま市環境白書をお読みいただく前に」のiiページ「施策体系の見直し」を、評価結果の「○」「△」「×」については、本書第1部12ページ「(5)対前年度比の評価」及び「(6)対年度目標値比の評価」を参照してください。

表3-1 「さわやかな空ときれいな水のある環境負荷の少ないまち」の評価結果

プロジェクト	指標		頁	対前年度比	対年度目標値比		
さわやか青空プロジェクト	移動発生源対策の推進	自排局の環境基準達成率	二酸化窒素	114	○	—	
			浮遊粒子状物質	114	○	—	
	交通量・交通流対策	市内一般道の混雑時平均旅行速度	117	×	△		
	沿道対策	(指標なし)					
	ライフスタイルの転換	バス利用者数	35	○	△		
	重点施策	さいたま市交通環境プランの推進	自排局の環境基準達成率	二酸化窒素	121	○	○
				浮遊粒子状物質	121	○	○
		総合都市交通体系の確立	(指標なし)				
		九都県市自動車排出ガス対策の推進	公用車の次世代自動車導入率	122	○	△	
			市域の次世代自動車登録台数	123	○	○	
アイドリングストップの徹底	(指標なし)						
きよらか水辺プロジェクト	水質の改善	公共用水域の環境基準の達成率	125	○	○		
	水循環の再生	雨水浸透面積率(推定)	129	△	△		
	身近な水辺空間の保全と再生	(指標なし)					
	重点施策	さいたま市水環境プランの推進	水環境プランの策定状況(終了)	131	—	—	
		公共下水道の整備・促進	公共下水道普及率	132	○	○	
		合流区域対策の推進	合流式下水道区域内の貯留施設累積整備量(補完管きよ)	132	△	×	
			合流式下水道改善率	132	△	×	
水環境整備事業の推進	憩える場所の整備数(高沼用水路)	133	△	×			
その他の展開	工場・事業場からの大気汚染防止	一般大気測定局の環境基準達成率	二酸化窒素	112	○	○	
			光化学オキシダント	112	△	×	
			浮遊粒子状物質	112	○	○	
		大気汚染に関する苦情件数	113	○	○		
	悪臭対策	悪臭に関する苦情件数	138	○	△		
	騒音・振動対策	騒音・振動に関する苦情件数	137	△	△		
	土壌・地下水汚染対策	(指標なし)					
	地盤沈下の防止	単年度沈下量2cm以上の面積	136	○	○		
	化学物質による環境リスクの低減	ダイオキシン類環境基準達成率	140	○	○		
		工場・事業場のダイオキシン類排出基準達成率	141	○	○		
		公共用水域における内分泌かく乱化学物質の予測無影響濃度達成率	141	△	△		
	環境の監視と調査研究の充実	(指標なし)					

表 3-2 「地球環境を守り循環型社会をつくるまち」の評価結果

プロジェクト	指標		頁	対前年度比	対年度目標値比	
ごみゼロプロジェクト	ごみの発生抑制	市民一人一日あたりのごみ排出量(資源物を除く)	147	○	○	
	リサイクルの推進	市民1万人あたりの団体資源回収運動団体数	152	○	○	
		ごみ排出量に対する資源物及び焼却灰等の再生利用率	153	○	△	
	ごみの適正処理	一般廃棄物の最終処分比率	156	○	○	
	循環型社会に向けた基盤づくり		(指標なし)			
	重点施策	市民に対するごみ・資源分別の徹底	生ごみ処理容器購入補助基数の累計	158	○	○
		事業者に対するごみの減量化・再資源化の推進	(指標なし)			
		事業系ごみのリサイクルの促進	事業系資源物搬入量	160	△	×
事業系ごみの適正処理の指導		(指標なし)				
産業廃棄物の適正処理の推進		(指標なし)				
いきいき地球プロジェクト	省エネルギーの推進		一人あたり電灯・電力消費量	77	データ未更新	
			一人あたり都市ガス消費量	77	データ未更新	
	新エネルギーの導入推進	住宅用太陽光発電設備設置補助件数(累計)	77	○	○	
	自動車対策の推進	市域の次世代自動車登録台数	87	○	○	
	その他の地球温暖化対策の推進	市民一人一日あたりのごみ排出量(資源物を除く)	79	○	○	
	重点施策	地球温暖化対策実行計画における公共事業の環境配慮	地球温暖化対策実行計画の改定	99	×	○
		さいたま市地球温暖化対策地域協議会活動の推進	地球温暖化対策地域協議会活動の推進	101	○	○
		公共施設への再生可能エネルギー等導入の検討	公共施設等(学校除く)への太陽光導入施設数累計	102	○	○
			市立学校への太陽光導入施設数累計	102	○	△
	その他の展開	オゾン層保護対策		(指標なし)		
酸性雨対策		(指標なし)				
熱帯林の保護		(指標なし)				
国際協力の推進		(指標なし)				
環境マネジメントシステムの認証取得		市内の環境マネジメントシステム認証取得事業所件数(公共施設を含む)	40	○	△	

表 3- 3「歩いて楽しい緑豊かなまち」の評価結果

プロジェクト	指標	頁	対前年度比	対年度目標値比		
ゆたかな緑・生き物プロジェクト	里やまの保全と創造	市内田・畑・山林・原野・池沼面積	49	△	△	
		自然緑地等の指定面積	51	△	△	
	都市の緑の保全と創造	一人あたりの都市公園面積	55	○	△	
	農地の保全	市内の農地面積	65	—	△	
	重点施策	(仮称)自然環境保全計画の策定	(指標なし)			
		農業振興ビジョンの推進	農業振興ビジョンの策定状況(終了)		—	
		都市公園整備事業の推進	都市公園面積	61	○	△
		オープン型民間緑地保全事業の推進	市民緑地・自然緑地指定面積	73	○	—
			市民緑地・自然緑地取得面積	73	○	—
		見沼グリーンプロジェクトの推進	見沼グリーンプロジェクトの推進状況	53	○	○
		直売農業・環境保全型農業の推進	特別栽培農産物件数	67	○	○
	エコファーマー数		67	△	△	
	農業振興地域整備計画の推進	農用地区域面積	68	—	○	
うるおいやすらぎ都市プロジェクト	地域の環境特性に配慮した整備・開発・保全	地区計画決定地区数	93	○	○	
	自然景観や街並みの保全・整備	(公財)さいたま市公園緑地協会の生け垣助成実績の累計	62	○	—	
		(公財)さいたま市公園緑地協会の保存樹木助成実績の累計	62	○	—	
	環境負荷の少ない交通体系の構築	市内一般道の混雑時平均旅行速度	92	×	△	
	環境に配慮した都市施設・建築物等の整備	大規模建築物等の景観誘導基準適合率	93	○	○	
	環境美化の推進	散乱ごみ減少率	63	×	△	
	重点施策	都市計画マスタープランの推進	(指標なし)			
		大宮駅東口都市再生プランの推進	大宮駅周辺地域戦略ビジョンの進捗状況(※21年度までは、大宮駅東口都市再生プラン)	104	○	○
		さいたま新都心整備事業の推進	クリーン作戦の実施	104	○	○
		農業生産基盤整備の推進	(指標なし)			
		氷川参道の整備	歩車分離区間の整備延長(累計)	69	○	○
		都市景観形成の推進	さいたま市景観表彰受賞累積件数	69	○	△
		市民とのパートナーシップによる環境美化活動の推進	市民清掃活動参加率(自治会)	70	△	△
総合都市交通体系の確立	(指標なし)					
その他の展開	歴史的・文化的環境の保全	(指標なし)				
	環境影響評価の推進	(指標なし)				

表 3-4 「だれもが環境保全に参加するまち」の評価結果

プロジェクト	指標		頁	対前年度比	対年度目標値比	
はつらつ参加・学習プロジェクト	環境教育の充実	環境学習資料の活用校数	14	○	○	
	環境学習の推進	こどもエコクラブ登録団体数	15	×	△	
		こどもエコクラブ登録会員数	15	△	△	
	環境保全活動の推進	環境保全活動団体数	28	○	○	
	重点施策	環境保全活動指導者の育成	(指標なし)	24		
		環境学習の拠点機能整備	(指標なし)	24		
		学校における環境教育の総合的、継続的な取組の支援	学校給食用牛乳パック回収量	27	△	○
			学校給食用牛乳パックリサイクル参加校数	27	○	○
市民参加型環境イベントの充実等によるパートナーシップの構築	環境フォーラム講演会参加者数	33	○	-		
その他の展開	エコビジネスの育成	市内の環境マネジメントシステム認証取得事業所件数(公共施設を含む)	40	○	△	
	環境情報の収集と提供	環境局 HP アクセス件数	24	○	○	

2 プロジェクトごとの評価

(1) 評価の考え方と手順

前節では、「前計画」に定められた施策体系に基づき、平成 22 年度における環境の現況と施策の進捗状況について評価をまとめました。

評価をより客観的で分かりやすいものとするために、現況評価指標及び施策評価指標の評価結果を用い、各プロジェクトを評価します。各プロジェクトの評価は、プロジェクトに位置づけられた複数の現況評価指標及び施策評価指標の評価結果をプロジェクトごとに集約し、評価項目数に対する評価結果が「○」及び「×」だった項目の割合を用い、以下の 3 区分で、各プロジェクトの目標に対する進捗状況の評価をしています。

表 3-5 プロジェクトの評価基準

区分	評価基準
A: 基本目標の実現に向かって順調に進んでいる	「○」が 60%以上で、「×」が 10%未満
B: 一部施策について一層の努力が必要である	「○」が 60%以上で、「×」が 10%以上 または 「○」が 50%以上 60%未満で、「×」が 10%未満
C: 多くの施策について一層の努力が必要である	「○」が 50%以上 60%未満で、「×」が 10%以上 または 「○」が 50%未満

この際、現況評価指標が設定されていない場合や、平成 22 年度の数値把握ができていない場合は、より厳しい評価となるよう、以下のように評価項目数をカウントしています。

- ・ 目標値が設定されていない場合、評価項目数は 1 とする (対前年度比のみの評価を実施する)
- ・ 現況評価指標が設定されていない場合、評価項目数は 2 とする
- ・ 現況評価指標で平成 22 年度の数値把握ができていない場合、評価項目数は 2 とする
- ・ 平成 22 年度が基準年の場合、評価項目数は 0 とする (平成 23 年度より評価を実施する)

(2)プロジェクトごとの評価結果

平成22年度の環境施策について、各基本目標の評価を取りまとめると、下表のようになりました。

現況評価指標及び施策評価指標からみて、基本目標の達成のために、「基本目標の実現に向かって順調に進んでいる」と考えられるプロジェクトが5つ、「一部施策について一層の努力が必要である」と考えられるプロジェクトが3つ、「多くの施策について一層の努力が必要である」プロジェクトが3つとなりました。

表3-6 プロジェクトごとの評価結果

基本目標	プロジェクト	対前年度比及び 対年度目標値比の評価結果			指標未設定及び データ未更新の 評価項目数
		○	△	×	
さわやかな空ときれいな水のある環境負荷の少ないまち	さわやか青空プロジェクト	10 62.5%	3 18.8%	1 6.3%	2 12.5%
	A：基本目標の実現に向かって順調に進んでいる				
	きよらか水辺プロジェクト	4 28.6%	5 35.7%	3 21.4%	2 14.3%
	C：多くの施策について一層の努力が必要である				
	その他の展開	13 54.2%	6 25.0%	1 4.2%	4 16.7%
	B：一部施策について一層の努力が必要である				
地球環境を守り循環型社会をつくるまち	ごみゼロプロジェクト	9 64.3%	2 14.3%	1 7.1%	2 14.3%
	A：基本目標の実現に向かって順調に進んでいる				
	いきいき地球プロジェクト	12 66.7%	1 5.6%	1 5.6%	4 22.2%
	A：基本目標の実現に向かって順調に進んでいる				
	その他の展開	1 10.0%	1 10.0%	0 0.0%	8 80.0%
C：多くの施策について一層の努力が必要である					
歩いて楽しい緑豊かなまち	ゆたかな緑・生き物プロジェクト	9 50.0%	9 50.0%	0 0.0%	0 0.0%
	B：一部施策について一層の努力が必要である				
	うるおいやすらぎ都市プロジェクト	13 65.0%	5 25.0%	2 10.0%	0 0.0%
	B：一部施策について一層の努力が必要である				
	その他の展開	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 100.0%
C：多くの施策について一層の努力が必要である					
だれもが環境保全に参加するまち	はつらつ参加・学習プロジェクト	8 61.5%	4 30.8%	1 7.7%	0 0.0%
	A：基本目標の実現に向かって順調に進んでいる				
	その他の展開	3 75.0%	1 25.0%	0 0.0%	0 0.0%
	A：基本目標の実現に向かって順調に進んでいる				

3 評価結果の総括

平成 21 年度及び平成 22 年度の各プロジェクトの評価結果は下表のとおりです。

なお、評価結果は次の区分により表示しています。

- A : 基本目標の実現に向かって順調に進んでいる
- B : 一部施策について一層の努力が必要である
- C : 多くの施策について一層の努力が必要である

表 3-7 平成 21 年度及び平成 22 年度の各プロジェクトの評価結果

基本目標	プロジェクト	評価結果		推移
		平成 21 年度	平成 22 年度	
さわやかな空ときれいな水のある環境負荷の少ないまち	(1) さわやか青空プロジェクト	B	A	↗
	(2) きよらか水辺プロジェクト	C	C	→
	その他の展開	C	B	↗
地球環境を守り循環型社会をつくるまち	(3) ごみゼロプロジェクト	C	A	↗
	(4) いきいき地球プロジェクト	A	A	→
	その他の展開	C	C	→
歩いて楽しい緑豊かなまち	(5) ゆたかな緑・生き物プロジェクト	C	B	↗
	(6) うるおいやすらぎ都市プロジェクト	A	B	↘
	その他の展開	C	C	→
だれもが環境保全に参加するまち	(7) はつらつ参加・学習プロジェクト	A	A	→
	その他の展開	A	A	→

平成 22 年度の評価は、評価の上がったプロジェクトが 4 つ、評価の下がったプロジェクトが 1 つとなっており、全体として、平成 21 年度と比べると、A 評価のプロジェクト数が 1 つ、B 評価が 2 つ増えて C 評価が 3 つ減少となり、やや改善しました。

表の(1)～(7)を 7 つの重点プロジェクトとし、評価結果の推移等について考察します。

(1) さわやか青空プロジェクト

さわやか青空プロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-8 さわやか青空プロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	B	C	C	B	B	A	B	A

前年度は「一部施策について一層の努力が必要である」との評価でしたが、平成 22 年度は「基本目標の実現に向かって順調に進んでいる」との評価に向上しました。今後もさらに、次世代自動車の導入とともに公共交通機関等の利用への転換を推進していく必要があります。

(2) きよらか水辺プロジェクト

きよらか水辺プロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-9 きよらか水辺プロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	A	C	B	B	C	C	C	C

前年度に続き「多くの施策について一層の努力が必要である」との評価になりました。公共用水域における環境基準は改善しているものの、未達成の状況が続いていること、雨水浸透面積率（推定）が年々低下していること、合流区域内の貯留施設累積整備量が横ばいで推移していることなどの改善や、用水路での憩える場所の整備が必要です。

(3)ごみゼロプロジェクト

ごみゼロプロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-10 ごみゼロプロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	B	B	A	A	C	B	C	A

前年度は「多くの施策について一層の努力が必要である」との評価でしたが、平成 22 年度は「基本目標の実現に向かって順調に進んでいる」との評価に向上しました。ごみ排出量に対する資源物及び焼却灰等の再生利用率や事業系資源物搬入量の改善が見られ、今後も継続的に取り組んでいく必要があります。

(4)いきいき地球プロジェクト

いきいき地球プロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-11 いきいき地球プロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	B	C	C	C	C	B	A	A

前年度に続き「基本目標の実現に向かって順調に進んでいる」との評価でした。住宅用太陽光発電設備設置補助件数累計、公共施設や市立学校への太陽光導入施設数(累計)、市域の次世代自動車登録台数は毎年増加しており、今後も継続的に取り組み、地球温暖化対策を推進していく必要があります。

(5)ゆたかな緑・生き物プロジェクト

ゆたかな緑・生き物プロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-12 ゆたかな緑・生き物プロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	C	C	A	A	C	C	C	B

前年度は「多くの施策について一層の努力が必要である」との評価でしたが、平成 22 年度は「一部施策について一層の努力が必要である」との評価に向上しました。減化学肥料・減農薬使用の農産物を生産する特別栽培農産物件数や環境にやさしい土づくりを行うエコファーマー数が増加しており、今後も環境保全型農業を推進していく必要があります。

(6)うるおいやすらぎ都市プロジェクト

うるおいやすらぎ都市プロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-13 うるおいやすらぎ都市プロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	C	B	A	A	A	A	A	B

前年度は「基本目標の実現に向かって順調に進んでいる」との評価でしたが、平成 22 年度は「一部施策について一層の努力が必要である」との評価に低下しました。散乱ごみ減少率の悪化や、市民清掃活動参加率が減少したことから、今後さらに、環境美化活動の推進をしていく必要があります。

(7)はつらつ参加・学習プロジェクト

はつらつ参加・学習プロジェクトの評価結果の推移は下表のとおりです。

表 3-14 はつらつ参加・学習プロジェクトの評価結果の推移

年度(平成)	15	16	17	18	19	20	21	22
評価結果	A	B	C	B	C	A	A	A

前年度に引き続き「基本目標の実現に向かって順調に進んでいる」との評価でした。ただし、こどもエコクラブ登録数や、学校給食用牛乳パック回収量が減少しており、今後も各学校への働きかけを進める必要があります。

4 改訂計画での現況評価指標及び施策評価指標

第2部で[参考]として記載した、改訂計画で定めた新規指標は以下のとおりです。なお、改訂計画は平成23年度を初年度とする計画であるため、ここでは評価を行わず、現況値と目標値を掲載しています。

表 3-15 改訂計画「基本目標 1」の評価指標

指標		単位	平成 21 年度	現況値 (平成 22 年度)	目標値 (平成 32 年度)
環境教育の推進	環境教育拠点施設数	施設	8	8	20
	さいたま市環境フォーラム参加者数	人	1,050	1,406	2,000
	こどもエコクラブ登録団体数・会員数	団体 人	22 1,810	19 1,859	75 3,300
	環境局ホームページアクセス件数	件/日	1,991	2,987	3,000
環境保全活動の促進	環境保全活動団体数	団体	94	99	増加
	さいたま市環境フォーラム参加者数【再掲】	人	1,050	1,406	2,000
ライフスタイル転換の促進	エコライフDAY参加人数	人	36,291	40,611	50,000
都市環境を支える産業の育成	産学連携による共同研究開発に対する支援実績	件	1	0	10
	環境マネジメントシステム認証取得事業所件数	件	225	233	300
国際協力の推進	JICA 研修生等受入数	人	11	12	継続
	環境関連施設における海外視察受入数	人	63	30	継続

表 3-16 改訂計画「基本目標 2」の評価指標

指標		単位	平成 21 年度	現況値 (平成 22 年度)	目標値 (平成 32 年度)
生物多様性・自然環境の保全	生物多様性の認識状況(言葉の認知度)	%	—	35	70
	市民参加型生きもの調査の仕組みの構築・稼働	無	無	無	構築・稼働 (平成 25 年度)
	特定外来生物の捕獲数	頭	98	113	100 (平成 24 年度)
	市域における担保性のある緑の面積	ha	5,889	6,198	7,620
快適環境の創造	自然緑地等の指定面積	ha	84.18	82.11	180
	屋上・壁面等緑化を施した公共施設数	箇所	28	29	50
	身近な公園整備率	%	81.7	82.5	88.2 (平成 25 年度)
	憩える場所の整備数(高沼用水路)	箇所	0	0	2 (平成 24 年度)
景観の保全	優れた都市景観に関する啓発のための表彰	点	121	154	
	景観重要建造物・景観重要樹木の指定	件	0	5	10
	耕地面積	ha	3,840 (平成 20 年度)	3,810	3,844 (平成 25 年度)
自然とのふれあいの確保	学校教育ファームの実施校数	校	35	82	全小中学校 (小学校 102, 中学校 57) (平成 24 年度)
	市民農園の開設数	箇所	43	51	80 (平成 25 年度)
	オープン型緑地の指定面積	ha	7.6	7.8	37

表 3-17 改訂計画「基本目標 3」の評価指標

指標		単位	平成 21 年度	現況値 (平成 22 年度)	目標値 (平成 32 年度)
地球温暖化対策の推進	次世代自動車登録台数	台	9,875	14,014	12,000 (平成 24 年度)
	(仮称)さいたま市地球温暖化対策実行計画 (区域施策編)の策定	無	無	無	策定 (平成 23 年度)
	温室効果ガス1人あたり排出量	t-CO ₂ /人	4.51 (+9.8%) (平成 19 年度)	4.44 (+7.9%) (平成 20 年度)	3.86 (-6.0%以上) (平成 24 年度)
	温室効果ガス総排出量	万 t-CO ₂	542.6 (平成 19 年度)	537.6 (平成 20 年度)	485.3 (平成 24 年度)
地球温暖化対策以外の地球環境保全の推進	カーエアコンのフロン類回収量(CFC、HFC 合計)	kg	13,505	11,871	適正処理の 指導継続

表 3-18 改訂計画「基本目標 4」の評価指標

指標		単位	平成 21 年度	現況値 (平成 22 年度)	目標値 (平成 32 年度)
大気環境の保全	一般局における大気汚染に係る環境基準達成率(二酸化硫黄、二酸化窒素、一酸化炭素、浮遊粒子状物質)	%	100	100	100
	自排局における大気汚染に係る環境基準達成率(二酸化硫黄、二酸化窒素、一酸化炭素、浮遊粒子状物質)	%	100	100	100
	有害大気汚染物質に係る環境基準達成率(ベンゼン、ジクロロメタン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン)	%	100	100	100
	光化学オキシダントの原因物質の濃度(非メタン炭化水素(午前6時から9時)の年平均値)	ppmC	0.26	0.24	0.20
	次世代自動車登録台数【再掲】	台	9,875	14,014	12,000 (平成 24 年度)
水環境の保全	水質汚濁に係る環境基準達成率(BOD75%水質値達成地点/測定地点)	%	74	83	85
	公共下水道普及率	%	86.6	87.9	90.0 (平成 24 年度)
	公共施設への雨水貯留タンク設置数(学校)	件	3	4	15 (平成 25 年度)
	水道使用量(市民一人一日あたり)	ℓ	305	305	順次減少
土壌・地盤環境の保全	単年度沈下量2cm以上の面積	km ²	0	0	0
生活環境の保全	道路交通騒音に係る環境基準達成率	%	93.7	98.5	100
	新幹線鉄道騒音に係る環境基準達成率	%	100	100	100
	騒音・振動・悪臭に関する公害苦情解決率	%	98.3	99.3	100
化学物質対策の推進	ダイオキシン類一般大気環境基準達成率	%	100	100	100
	ダイオキシン類水質土壌環境基準達成率	%	94.4	100	100
	環境コミュニケーションの実施回数	回	2	3	10 (平成 25 年度)

表 3-19 改訂計画「基本目標 5」の評価指標

指標		単位	平成 21 年度	現況値 (平成 22 年度)	目標値 (平成 32 年度)
一般廃棄物 対策の推進	市民一人一日あたりのごみ排出量 (資源物を除く)	g	800	778	780 (平成 29 年度)
	一般廃棄物再生利用率	%	21.8	22.4	34 (平成 29 年度)
	一般廃棄物最終処分比率	%	8.1	7.4	6 (平成 29 年度)
産業廃棄物 対策の推進	産業廃棄物排出量	千 t /年	1,438 (平成 20 年度)	655 (平成 21 年度)	1,438 (平成 27 年度)
	産業廃棄物最終処分量	千 t /年	25 (最終処分率 2%) (平成 20 年度)	8 (平成 21 年度)	10 (平成 27 年度)

《エコ・ラム 10》省エネ製品買換ナビゲーション「しんきゅうさん」

チャレンジ25キャンペーン（環境省）では、省エネ製品への買換えを促進するための省エネ製品買換ナビゲーション「しんきゅうさん」を開発し、平成 21 年2月6日から、同システムの運用を開始しました。

同システムは、家庭での消費電力量の多い、エアコン、冷蔵庫、照明器具、テレビなどについて、省エネ製品への買換えによる CO₂削減効果やランニングコストの低減効果などを、携帯電話やパソコンを利用するなどして店頭や自宅等で簡単に把握できるシステムで、利用者のニーズ、用途に応じて対応できる機能を有しています。



省エネ製品買換ナビゲーション「しんきゅうさん」 <http://shinkyusan.com/>

【参考】 市民アンケート結果

さいたま市では、「さいたま市環境基本計画（改訂版）」の基本目標の実現状況について、指標及び数値目標による定量的評価と市民の意識調査による定性的評価を行うことを定めています。そこで市民の環境施策に対する評価や関心の状況等を伺うため、平成23年9月に環境に関するWEBアンケートを市民1,000人を対象に実施しました。以下に、その結果をまとめました。

Q1.基本目標1から5の進捗状況について、どうお考えですか。

5つすべての目標に対して、進捗は「どちらとも言えない」が最も多く、「順調である」、「まあまあ順調」の合計より「あまり進んでいない」、「進んでいない」の合計の方が多い結果となりました。

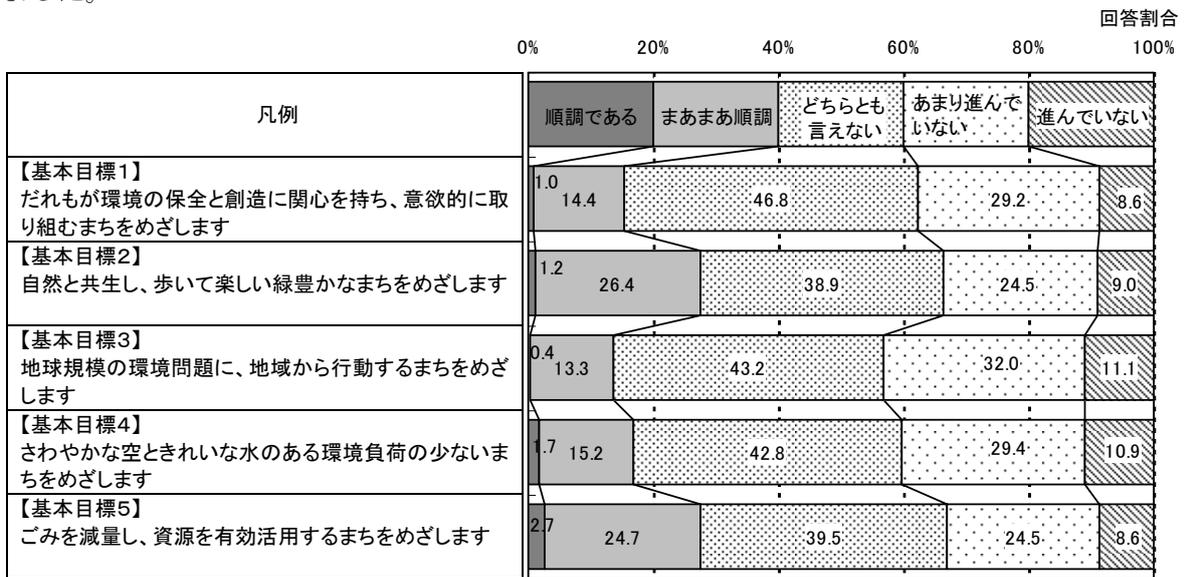


図 3-1 基本目標1から5の進捗状況について

Q2. Q1の基本目標の進捗状況を踏まえ、さいたま市がめざす「望ましい環境像」の実現に、順調に近づいていると思いますか。

「どちらとも言えない」が最も多く、次いで「あまり近づいていない」が多い結果となりました。

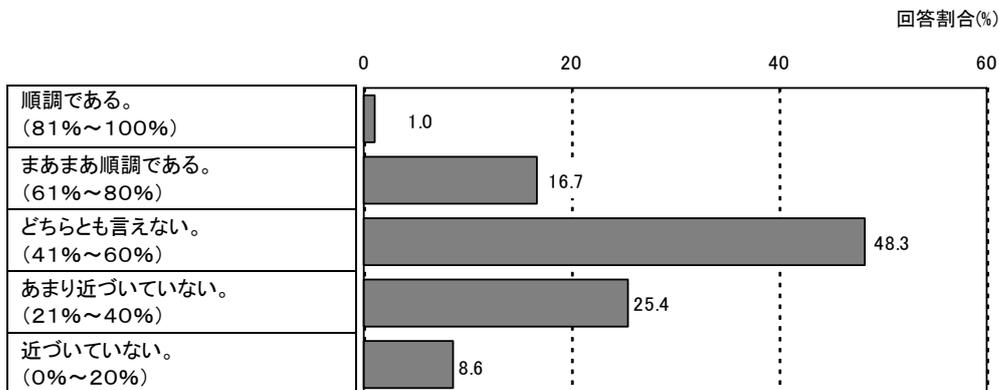


図 3-2 「望ましい環境像」の実現に近づいているかについて

Q3. 基本目標は、いくつかの施策を柱に展開しています。それぞれの施策への関心度について、
 どうお考えですか。

施策として、「とても関心がある」、「やや関心がある」の合計が最も多いのは、「快適環境の創造」で、次いで「生活環境の保全」、「水環境の保全」が多い結果となりました。

回答割合

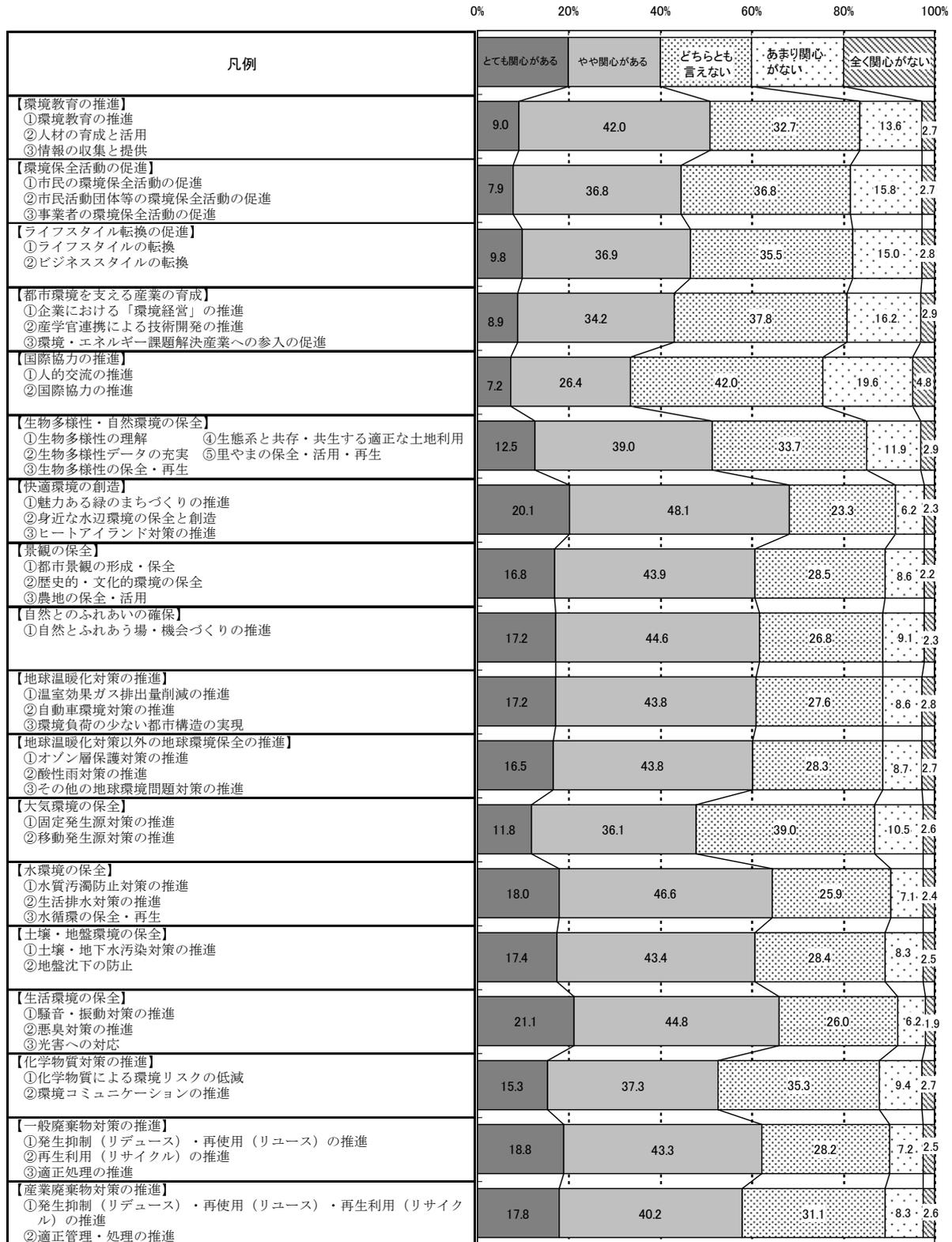


図 3-3 それぞれの施策への関心度について

Q4. 「生物多様性」という言葉の意味を知っていますか。

「意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」が最も多く、次いで「言葉の意味を知っている」が多い結果となりました。

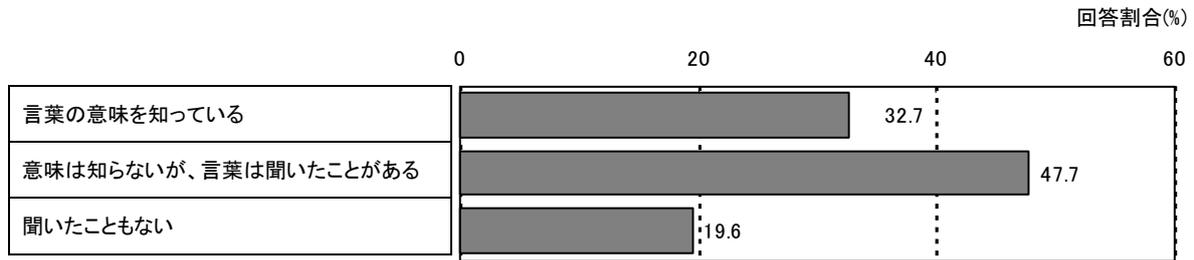


図 3-4 「生物多様性」の言葉の認知度について

《エコ・ラム 11》生物多様性の大切さ

～ 人も生きものもつながりあって生きている ～

地球上にいる膨大な数の動物や植物などは、みんな相互に支え合って生きています。生きものたちは森・里・川・海といった環境の枠組みに対応して、多様な生態系を構成していますが、近年、この生物多様性（＝様々な生きものの豊かな個性とつながり）が急速に失われています。

私たちの暮らしは、動植物を原材料とした食糧が大半であり、また、極端に言えば、植物等が光合成で発生する酸素がなくては生きていけません。

生物多様性危機の原因として、気候変動・開発・乱獲・里や山の減少・外来種によるものなどが挙げられますが、その多くは、私たち人間の活動に起因しています。

生物多様性から受ける多様で豊富な恵みが失われることは、私たちの生活に大きな影響を与えることになり、様々な生きものの豊かな個性とつながりを維持するために、生物の種やその遺伝子、そして、生態系を守っていくことが大切です。

平成22年の国連が定める「国際生物多様性年」をきっかけに、今、何ができるか考え、身近なところから取組をはじめましょう。



【取組の例】

- ・ 野外で生きものを観察（生きものの多様性を体感）してみる。
- ・ 木や花を植えるときは、もともとその地域に生えているものを植える（地域の自然保護）。
- ・ ペットを飼う場合は、最後まで面倒を見て、決して野外に放さないようにする（生態系のかく乱防止）。
- ・ ゴミを捨てる場所はルールを守り、野生動物に餌を与えないようにする（生物本来の生きる力を奪ってしまいます）。
- ・ CO₂を削減し、地球温暖化を防止する（生き物が住める環境を守る）。
- ・ 「川を汚さない」「むやみに野草を採らない」など、身近な自然を大切にする。

地球のいのち、つないでいこう



生物多様性

第2章 今後の取組

1 さわやかな空ときれいな水のある環境負荷の少ないまち

(1) さわやか青空プロジェクト

二酸化窒素、浮遊粒子状物質などは引き続き環境基準を達成していますが、本市は首都圏内の自動車交通網の要所であり、通過交通も含め自動車交通量が多い地域であることから、都市計画道路の整備や違法駐車防止対策などの施策に加えて、次世代自動車等の導入、鉄道やバスなどの公共交通機関や自転車の利用を今後も促進していく必要があります。

また、自動車騒音などの面でも、引き続き生活環境の保全に向けた施策の推進が必要です。

(2) きよらか水辺プロジェクト

公共用水域（河川）での環境基準達成率は、前年と比べ横ばい傾向です。BOD（生物化学的酸素要求量）などの生活環境項目の環境基準については、依然未達成の状況にあるため、公共下水道の整備や接続の促進、合流式下水道の改善などの生活排水対策や、工場・事業場対策を推進する必要があります。

また、水循環の再生に向け、雨水浸透が可能な農地や山林などの自然的土地利用から都市的土地利用への転換を抑制するとともに、雨水浸透枘の設置、透水性舗装の実施などの施策をあわせて推進する必要があります。

本市は、荒川や見沼田圃など水辺の原風景が残されていますが、水源の枯渇などによって平常時の河川水量が減少しているため、下水処理水の河川への還元や雨水の有効利用、湧水の保全などにより河川水量の確保に努めていくことが必要です。

(3) その他の展開

悪臭、騒音、振動に関する苦情件数について、悪臭の苦情件数は前年に比べ減少していますが、引き続き臭気対策や、家庭生活や店舗営業が原因となる近隣騒音や深夜営業騒音などに対する指導等を推進していく必要があります。

また、環境中や、事業場等の排ガス中のダイオキシン類濃度はそれぞれの基準を達成しました。公共用水域における内分泌かく乱化学物質の予測無影響濃度達成率は前年と比べ横ばいとなっており、引き続き事業所等での化学物質の適正管理の徹底に努める必要があります。

2 地球環境を守り循環型社会をつくるまち

(1) ごみゼロプロジェクト

市民一人一日あたりのごみの排出量が年々着実に減少していることは大変望ましいことです。今後もこの傾向を維持していく必要があります。ごみの排出量の減少に伴って、一般廃棄物の最終処分量も減少していますが、ごみ排出量に対する資源物及び焼却灰等の再生利用率が伸び悩んでいることから、資源物や不燃物などからの資源回収や、焼却灰・溶融スラグ等の有効利用を推進する必要があります。

生ごみ処理容器の購入補助基数が増えているのは大変良いことです。しかし、市に寄せられた廃棄物等に関する苦情や、不適正処理件数は増加しており、不法投棄や野外での焼却等の不適正な処理について防止に向けた普及啓発が必要です。

(2)いきいき地球プロジェクト

平成 22 年度に算定したさいたま市の平成 20 年度の温室効果ガス排出量は、537.6 万 t-CO₂で、全体の 54.5%が家庭やオフィスなどの民生部門となっています。そのため、温室効果ガス削減のためには市民や事業者の電気やガスの消費量を減らしていくことが最も有効ですが、十分な成果を上げていない状況が続いています。市民、事業者の意識改革や省エネルギー技術の導入を推進していく必要があります。

そこで、さいたま市では、平成 21 年度より住宅用太陽光発電設備設置補助事業を開始し、設置件数は大きく伸びています。また、公共施設等（学校除く）への太陽光発電施設の導入や E-KIZUNA Project の推進などによる次世代自動車の台数も順調に推移しています。さらに市立学校への太陽光施設の導入の検討などを行い、引き続き地球温暖化防止に向けた対策を推進していくことが必要です。

(3)その他の展開

地球全体では、オゾンの量は、30 年前の昭和 54 年と比較して平成 22 年は平均で約 2.1%減少しました。さいたま市では、自動車解体事業場に対してオゾン層破壊の原因となるカーエアコンのフロン類の回収処理指導を行っています。酸性雨については、平成 2 年度からモニタリングを実施しています。pH4.0 以下の酸性雨の発生回数は前年度に比べ減少しており、引き続き対策を推進していくことが大切です。

3 歩いて楽しい緑豊かなまち

(1)ゆたかな緑・生き物プロジェクト

田・畑・山林・原野・池沼面積などの自然的土地利用は年々減少する傾向を示しています。平成 22 年度は、市民緑地・自然緑地の指定・取得として一ヶ所を新たに設置しました。里やまや農地など、自然に近い緑の保全・再生を推進していく必要があります。

(2)うるおいやすらぎ都市プロジェクト

地区計画の決定、住宅地の接道部緑化に対する助成（生け垣助成）、保存樹林の指定など、全体的には順調に推移しています。しかし、散乱ごみの実態調査では、散乱ごみ数が前年度より増加しました。より一層美化活動を推進していく必要があります。

(3)その他の展開

さいたま市には、平成 22 年度末現在、国・県・市指定の文化財が 523 件あります。歴史的・文化的な遺産や街並みを文化財や景観地等の指定により守っていくとともに、保護・保全に対する市民や事業者の意識啓発を図っていくことが大切です。

4 だれもが環境保全に参加するまち

(1)はつらつ参加・学習プロジェクト

環境保全活動団体数などは増加傾向にありますが、こどもエコクラブ登録団体数、同会員数が減少しました。今後も、より多くの市民へ環境について考える機会や参加できる企画を提供していく必要があります。

(2)その他の展開

平成 22 年度末時点の公共・民間を併せた市内の環境マネジメントシステム認証事業所件数は 233 件でした。また、平成 22 年度の環境局ホームページのアクセス件数は、1 日平均 2,987 件で、前年より大きく上回りました。今後もエコビジネスの育成や環境情報の提供に努めていく必要があります。